藤屋 侃士
(下松市幸ケ丘)

生活に生きる「季語」

恥ずかしながら「季語」に関心を持つようになったのは、最近のことである。数年前、月曜日の「走れおばさん」の中村光子さんから誘われて俳句の会に参加した。しかし、居酒屋で行い、酒を酌み交わすことの方が目的で、俳句を詠むことに熱が入ったとは言い難い。

それが最近では、日々の生活の中で「季語」について考える。鶏が先か、卵が先かはよく分からぬが、とにかくほとんど全ての生活の出来事の中に「季語」を感じる。

春、夏、秋、冬の季節は日本に限ったものではない。なのに、なぜ日本人はその季節の中に「季語」を重んじる生活をするようになったのだろうか。日本人の先祖の言葉に対す憧憬の深さに、自分も日本人でありながら誇りすら持つ。

以前は、俳句のための「季語」と思っていたが、そうではなく、最近は生活の中に「季語」を感じることが多い。それが自分の生活に彩りを添えてくれているように思える。

「プレバト」という俳句を詠むTBS系列のテレビ番組が「季語」について、その憧憬の深さを伝えてくれる。

辛口の選者は「美しき、季節と日本語(ワニブックス)」の著者である俳人の夏井いつきさんだ。この本で初めて彼女の存在を知ったが、中学校の国語の先生から転身したという夏井さんは、季節と季語を楽しく解説してくれる。助詞を一字変えるだけでこうも日本語が変わるのかとびっくりもさせられる。

それにしても誰が造った訳でもないが、日本語を振り返ってみると、「季語」は私たちの生活の中にある季節を彩り、豊かにしてくれていることが多い。

この季節、釣り好きの友人のお父さんがよく「眼張(メバル)」を届けて下さる。眼張が最も美味しいのはこの季節のもので、先日も妻がすぐ煮付けにしてくれた。季語のことを考えながら食べると目が大きい白身のこの季節の眼張は確かに旨い。魚の煮付けをこれ程美味しいと思いながら食べるようになったのも、あるいは「季語」のせいかもしれない。それ程、生活の中に季語が生きているのである。

季語や節気の名によって、時候の挨拶を交わす習慣は日本独特のものように思える。

現代の傾向として、季節や季語が生活を離れ、机上の形骸化されたものになりつつあるのは残念なことである。先人の素晴らしき伝統を継承するのは私たち一人一人の役目ではないか。改めて美しき日本語に関心を持つ。

最近「美しき、季節と日本語」の本とともに手にしたのが、趣きを全く異にする「修道院のお菓子と手仕事(大和書房)」である。

全国各地にあるカトリック教会の修道女たちが造る、手造りの菓子と修道女が造る手仕事の品物が紹介されている。

こじつけと言われるかもしれないが、私にはこの二つの世界に相通じるものを感じる。修道女たちの生き方の「季語」は「神への賛美」。どの季節にも変わることなく存在しているように思える。

「美しき、季節と日本語」(夏井いつき著)

修道院のお菓子と手仕事の本